せんぐう館 平成 27 年度企画展示

家と神　―生活の中の信仰

展示の手引き

開催期間　平成 28 年 1 月 27 日［水］から 3 月 21 日［月］

場　　所　せんぐう館（伊勢神宮外宮）

目　次

はじめに　頁

一、　神話にみる注連縄　4

二、　注連縄とは　7

三、　伊勢の注連縄　9

四、　蘇民将来のおはなし　11

五、　ご家庭でのおまつり　14

六、　神宮大麻とは　18

七、　大麻奉製と頒布のお祭り　20

八、　お神札のまつり方　23

おわりに―暮らしの中に神宮大麻を

凡　例

・この冊子は平成 28 年 1 月 27 日から 3 月 21 日にかけて式年遷宮記念せんぐう館において開催する企画展示「家と神―生活の中の信仰」に際して作成したものです。

・図録の資料図版の順は、展示順序を示すものではありません。

・本誌掲載の写真、地図および記事の複製・無断転載等は固く禁じます。

はじめに

古来、日本人は神々と共に生活してきました。自然の中に恵みを与えてくださる神の存在を感じながら人々は、慎み深い暮らしをつづけてきたのです。

現代でも家々には神棚があり、正月になれば玄関等に注連縄（しめなわ）を飾る風習が残っています。それは神聖なもの清浄なものを尊ぶ心の表れでもあります。

本企画では、お神札のおまつりや伊勢地方独特の注連飾を通して、家庭の信仰について紐解きます。

平成 28 年 1 月 27 日

式年遷宮記念　せんぐう館

神話にみる注連縄

国史絵画：「天照大神」画：伊藤龍涯

天岩戸開き～神話から読み解くもの～

天照大神の弟神である須佐之男命が、高天原の水田の畦を壊したり、排泄物をまき散らしたり、また、皮を剥いだ馬を機屋に投げ入れ、神聖な生業を穢された行為に、天照大神は天岩屋に入って岩戸を閉じてしまわれました。すると、世の中は闇に包まれてしまい、様々な災いが起こりました。困った神々は天安の河原に集まり智恵を絞りました。岩戸の前に榊を立て、鏡と勾玉で飾り、常世の長鳴鳥を鳴かせて、天宇受売命が神楽舞をしました。神々が面白おかしく賑やかにしているのを気にされた大神が、その様子を垣間見ようと岩戸を開かれた瞬間、力のある天手力男神が岩戸を引き開ける事に成功。天照大神が二度と岩戸に戻られることがないよう、布刀玉命（太玉命）が岩戸の入り口に尻久米縄を張りました。それにより世の中は、秩序正しく平安を取り戻しました。

記紀では、神々が、お互いのご神徳を充分に発揮し、力をあわせて難局を解決していく様を美しく描いています。

『鼇頭古事記』（神宮文庫蔵）

『古事記』の「天岩戸開き（あめのいわとびらき）」では、天手力男神（あめのたじからおのかみ）が岩戸を引き開けた後、天照大神（あまてらすおおみかみ）が再び岩戸に戻られることがないようにと、布刀玉命（ふとだまのみこと）（太玉命）が「尻久米縄（しりくめなわ）」を張りました。その場への立ち入りを禁ずる結界としての注連縄の起源を伝えています。※尻久米縄とは、端を編んだまま、切らないでおく縄をいいます。

注連縄とは

注連（しめ）とは「占め」に由来するといわれ、標縄・七五三縄・〆縄とも書き、地域によって多様な飾り方があります。日本古来の稲作文化を背景に民間信仰から自然発生したと考えられ、日常生活の中ではお正月に家の玄関や自動車などに飾りつけ、五穀豊穣（ごこくほうじょう）や家内安全、災い除けを願う習わしがあります。神道の世界では神社の境内やご神木など、清浄な場所を守る結界として役割があります。また、大相撲で最高位の力士が締める横綱も注連縄に起源を持ちます。

素材

干した稲藁（いなわら）を素材とするものがほとんどで、縄として様々な形に結い上げ、部分ごとに組み合わせていきます。

産地

伊勢西方を流れる一級河川、宮川河畔の田園地帯に位置する度会郡（わたらい）玉城町（たまき）の中角地区では、農家を中心に古くから注連縄づくりが盛んです。様々な道具を駆使して、手作りで丈夫な注連縄づくりがなされています。

伊勢の注連縄

一般的な注連縄は正月松(まつ)の内(うち)（15 日頃）までには取り外され、地元の神社等でお焚(た)き上げされますが、伊勢地方では年末に新しく取り替え、一年中玄関先に飾って無病息災(むびょうそくさい)を願う民間の風習があります。伊勢型(いせがた)とも呼ばれ、橙(だいだい)や柊(ひいらぎ)など縁起を担いだ植物でお飾りし、中央に「蘇民将来子孫家門(そみんしょうらいしそんのかもん)」と書いた木札を付けます。木札の文字は「蘇民伝説(そみんでんせつ)」に由来すると言われています。

注連縄飾りの由来

木札

家内安全や商売繁盛を祈ります。

紙垂（しで）

清浄な空間であることを示します。

藁（わら）

主食である米に感謝し豊作を願います。

裏白（うらじろ）

葉の裏までが白いところから、清らかな心で新年を迎える意味を示します。
また地方によっては夫婦円満に白髪が生えるまでと、長寿を願います。

譲り葉（ゆずは）

葉が成長すると旧葉がこれを譲るように落葉するところから、「代々を譲る」子孫繁栄の象徴とします。

柊（ひいらぎ）

葉の棘（とげ）で家に邪気が入らないようにします。

橙（だいだい）

果実は年中木から落ちず、そのまま木に置くと2・3年は枝についています。
この特徴から子孫繁栄と代々家が続くように願います。

馬酔木（あせび）

馬が食べるとその成分で酔ったようになるところから、魔除け、疫病除けとします。

蘇民将来（そみんしょうらい）のおはなし～民話伝承から～

その昔、旅の途中であった武塔神（むとうしん）（スサノオノミコト）が、伊勢の地で暴風雨に遭い、一夜の宿を乞いました。そこには巨旦将来（こたんしょうらい）と蘇民将来（そみんしょうらい）という兄弟が住んでいました。

裕福であった兄の巨旦は宿を断ります。困ったミコトは貧しい弟の蘇民の家を訪ねました。

慈悲深い蘇民はこれを温かく受けいれ、丁重にもてなしました。

翌朝、ミコトは疫病除(えきびょうよ)けとして、蘇民の家に茅(ち)の輪(わ)を玄関に掛けておくよう伝え立ち去りました。

以後、蘇民の家では代々この言いつけを守り、末永く健康で幸せに暮らしたと伝えられます。

こういった伝承から伊勢地方では「蘇民将来子孫家門」と書いた木札を注連縄に付けるようになったといわれています。

※蘇民将来の伝説は各地に伝わりますが、『備後国風土記』に見る疫隅(えのくまの)国社(くにつやしろ)の条に「武塔神(むとうしん)」と記されているのが初見とされています。

ご家庭でのおまつり

現代のように多様化する生活習慣のなかで、ご家庭で神様をおまつりするということは、どのような大切な意味があるのでしょうか。江戸時代後期の安永年間（1772～1780）、伊勢御師（おんし）の檀家帳（だんかちょう）によると、神宮のお神札（ふだ）は全国戸数の 9 割でおまつりされていたことが記録されています。これは毎年年末に、御師（おんし）が全国の檀家（だんか）にお神札（ふだ）と暦（こよみ）を配り、伊勢信仰を流布（るふ）していたことによります。明治時代、御師制度が廃絶すると、明治天皇の思（おぼ）し召（め）しのもと、毎年「神宮（じんぐう）大麻（たいま）」を頒布（はんぷ）することになりました。現在では全国の神社を通じて配られ、約 900 万のご家庭でおまつりいただいております。神棚におまつりされるお神札は日々の感謝や祈りを通して、常に神と人とを結び続けています。

「朝夕に皇大御神（すめおおみかみ）を慎み敬い拝むための大御璽（おおみるし）として

神宮大麻を国民全戸に漏（も）れおつることなく奉斎（ほうさい）せしめよ」

御師邸（おんしてい）での神楽

御師（おんし）とは御祝詞師（おんのりとし）が約（つづ）まった名で、古くは神宮の権禰宜（ごんねぎ）が公家をはじめ武家の私的な祈祷（きとう）を取り次いでいました。江戸時代、御師の利権そのものが売買されるようになると、分家して御師の数は急増し、最盛期には宇治（内宮）と山田（外宮）の門前町で約８００軒を数えました。御師の邸宅で御神楽を奉納した参宮者は、祈祷が込められたお神札を伊勢参宮の御印（みしるし）とし全国に持ち帰りました。

おはらいたいま
御祓大麻

おはらいたいま
御祓大麻は親しみを込めて「お伊勢さん」「お祓いさん」と呼ばれていました。お神札には御神号（ごしんごう）の下に御師（たゆう）（大夫）の名が記されています。

天照大神のご神徳

農業史絵画：「斎庭の稲穂」画：今野可啓

『日本書紀』は、そのご神徳を「光華明彩（ひかりうるわしく）」と称え、国々を隅々（すみずみ）まで明るく照らす、貴い日の御子（みこ）と伝えています。『古事記』の「天岩戸開き」にも象徴されるように、天照大神はそのご神徳（お働き）が充分に発揮されることで、日本の国が秩序正しく平和となり、豊かな自然の恵みとともに人々の暮らしをあたたかく見守ってくださる、貴い神様として読み解くことができます。

神宮大麻（じんぐうたいま）とは

大麻は、「おおぬさ」とも読み、もともとはお祓いに使用する道具を指します。また、麻は「ぬさ」とも読み、幣（ぬさ）とは神前に奉られる布や絹・麻・木綿（ゆう）のことを言います。いつの頃からか大麻が神札として扱われ、明治時代までは「御祓大麻（おはらいたいま）」と呼ばれ、各家庭でお祭りされておりました。現在、神宮の大麻は大きく二種類があります。一つは毎年年末にかけて、全国の氏神様からお配り頂く「頒布大麻（はんぷたいま）」、もう一つは皆様が参拝の時に社頭でお受け頂く「授与大麻（じゅよたいま）」（剣祓（けんばらい）や角祓（かくばらい））です。どちらも「天照皇大神宮（あまてらすこうたいじんぐう）」の宮号（きゅうごう）が記され、伊勢神宮のお神札には違いはありませんが、お祓いの際にお札に込められる祈りが分けられています。「頒布大麻」は、国の平安と全国のご家庭の無事を祈り、国の隅々にまで天照大神のご神徳が行き渡るように祈られ、「授与大麻」は、神宮にご参拝頂く皆様の願いのまま、個人の家内安全や商売繁盛の祈りも込められます。

毎月行われる、大麻修祓式

神宮のお神札やお守りは、神宮の頒布部にある大麻奉製所で、毎朝潔斎をして清浄を期した大麻奉製員の手により、一体一体丁重に奉製されています。新しく奉製されたものは、月に数度、頒布部の祭場で神職が大麻修祓式を行い、御霊を込めて清浄にお祓いをします。祭典に際しては、神職が前晩から斎館に参籠して心身を清めます。祭典当日、神職（禰宜1 名・権禰宜1 名・宮掌2 名・出仕1 名）が奉仕にあたり、大麻奉製員 2 名が参列します。最初に神饌と奉仕員を祓い清め、神饌を奉奠し祝詞を奏上します。その後、禰宜が大祓詞を奏上し、大麻で奉製が終了したお札やお守り、授与品のすべてを祓い清め、お祭りは終了します。毎月この大麻修祓をくりかえし行うことで、それぞれのお祈りを込めた清らかなお札やお守りを、はじめて皆様に授与することができるのです。

じんぐうたいまほうせい　はんぷ
神宮大麻奉製と頒布のお祭り

奉製のお祭り

たいまれきほうせいはじめさい
<u>1 月上旬　大麻暦奉製始祭</u>　　頒布部の祭場において、今年の大麻と暦の奉製の開始をご神前に奉告します。（伊勢神宮の頒布部で大麻と暦の奉製が始まります。）

<u>４月中旬　大麻用材伐始祭</u>（たいまようざいきりはじめさい）　**大麻のご用材を伐り始めるにあたり、「大宮山の木木の木本に坐す大神」をおまつりします。**

<u>１２月下旬　大麻暦奉製終了祭</u>（たいまれきほうせいしゅうりょうさい）　**頒布部の祭場において、今年の大麻と暦の奉製が無事終了したことをご神前に奉告します。**

頒布のお祭り

9 月1 7 日　大麻暦頒布始祭　　伊勢神宮の内宮神楽殿で、全国の神社関係者が参列のもと、年末にお配りする大麻と暦をお頒ちします。（これより、全国の神職や氏子総代が神宮大麻と暦を各地に頒布します。）

翌年3 月5 日　大麻暦頒布終了祭　　伊勢神宮の内宮神楽殿で、全国の神社関係者が参列のもと、今年の大麻と暦の頒布が無事終了したことをご神前に奉告します。

お神札のまつり方

ご家庭で神棚を設けてお札をおまつり頂くのが一般的ですが、核家族化や住宅事情の多様化する今日においては、そのまつり方も様々です。神宮では、現代の住宅事情に合わせ、簡易な小型神棚から洋風のやしろ型のものまで、幅広い種類の神棚を社頭にて授与しております。また、萱葺型（かやぶきがた）の神棚は社殿（しゃでん）の神明造（しんめいづくり）を模した形となっています。

ご家庭でのおまつり　Q&A

Q1 ：神宮と他の神社のお札を一緒の神棚に祀っても、神様同士、喧嘩しないのでしょうか?

A1 ：もちろんそうではありません。神話に記される神々も、それぞれのご神徳（お働き）を発揮することで、皆が調和し共存しながら発展していく精神性を説いています。神道の教えは共存共栄です。お守りに関しても同じことが言えます。

Q2 ：お札やお守りは一年で替えなければならないのですか?

A2 ：日本人は古来、季節の節目に神をまつり、家々の清浄を期して自身や家族の無事を祈ってきました。お正月はもちろん、それぞれの人生の節目において、新たなお気持ちでお受け頂いてはいかがでしょうか。

Q3 ：自宅に神棚がないのですが、お札はどうすればいいですか?

A3 ：住宅事情もありますが、壁掛けできる簡易なものや、洋風のインテリアにあわせた神棚もありますので、是非丁重におまつりいただく事をおすすめします。

おわりに

～暮らしの中に神宮大麻を～

暮らしの安心と安全が叫ばれる昨今、急速に進む高度情報化とグローバル化の中で、私たちの衣・食・住の環境も大きく変容しています。

先行きが不透明な現代社会にあっても、全国の地域社会で継承される日本古来の伝統と祭は、人々の絆を深めながら未来の暮らしを明るく照らそうと続けられてきた文化です。ご家庭でお神札のおまつりを通じて、家族の健康と幸福を祈り日々の感謝を捧げることで、天照大神をはじめ、地域の氏神様とともに神々のご神徳を身近に感じて頂きながら、心豊かな暮らしを実感していくことが、現代生活においてこそ大切ではないでしょうか。